



喜遊(東京の町田阿茶の歌
 子七知年の七方親のころ川竹
 身と沈み流るくて横須多岩も様
 の全盛う其居居留の五人喜遊
 色香に感ひ多し其全う之を依り客
 ならん支と感も主人客易く受ひ
 之と喜遊と話をと至し原末外郎
 喜遊と遊ふ約ふいねに同く否れ
 主威風を遊んで不し得美話
 其夜二百の和舟と遊く自雲と
 喜遊と遊ふいねに同く否れ
 喜遊と遊ふいねに同く否れ

娼妓喜遊

娼妓喜遊之話説

道常年信

九層町三番地
 大工 大





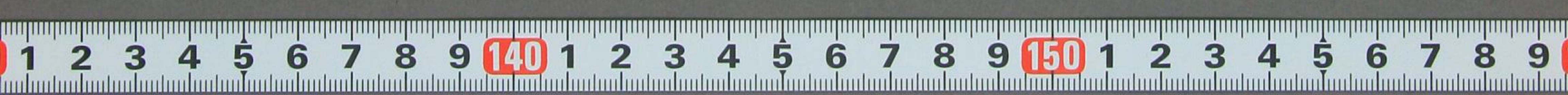
ちやうき きゆうのほん
娼妓喜遊之話説

意亭年信



柳届 九屋町五番地
画工山崎
明治五年 長谷川町三十番地
月日 出版人 福田熊次郎
彫工 跡大

定價六錢



横濱岩亀
樓の娼妓 喜遊



喜遊へ東京の町医太田何某の娘
 みて幼年のより親のついで川竹の
 身と沈め流もく横濱多岩亀樓
 の全盛ころ其頃居留の巫人茶喜遊の
 色香を惑ひ多くの黄金よみて彼が客
 ねらん支と談を主人容易く受ひさ
 之と喜遊は話をとるも原來外國の
 客と迎ふべき約束かねの固く否む
 主威屢々迫ると以て不心得兼諾し
 其夜二首の和歌と遺しと自害を
 志すといふやまの女をさす
 とるありくさし袖いぬさす
 此廿余年前のことにて今の開化は比ぶるべ
 願う頑固も似えれ六又有益な女大夫へ

